

誰も帰って来ない夜

キム・スム

1

赤銅色の手つき鍋では、ひと山のアヒルの骨がぐつぐつと煮えていた。アヒルの骨からにじみ出た黄色く濁った油がぷかぷかくっついて浮かび上がり、オンドルの床紙のような膜を張っている間に、居間と台所は次第に暗闇の中に沈んでいった。台所の向かい側のきっちり閉まった部屋の戸が音もなく開くと、老人が出てきた。その場で足踏みをするようにして玄関の方へ向きを変え、両足をずるずると引きずりながら歩いて行った。あごを持ち上げているせいか、老人の身体は、まるで宙に浮いてぶらりと垂れ下がっているようにも見えた。玄関のドアが開いたかと思うと、一瞬にして、老人は玄関の外に消えるようにいなくなった。

玄関のドアがひとりでに閉まるのとほぼ同時に、ヨンスクが食卓の椅子からすくっと立ち上がった。ヨンスクは台所の蛍光灯のスイッチを押した。

ガスレンジの火力は精一杯弱火にしてあり、手つき鍋のアヒルの骨のスープはとろ火でとろとろとしつこく煮込まれていた。一日一日、静かに粘り強く続く老人の日常のようだ。老人が一日中、家の中に閉じこもってすることと言えば、アヒルの骨を煮込んだり、伝記や聖書を筆写したり、テレビのニュースを見たりすることだけだった。日が暮れると、老人はそっと部屋を出て、散歩に出かけるのだった。

老人の散歩は、それ程長くはなかった。一時間ばかり、せいぜい家の近所の路地を歩き回って帰って来た。家からあまり遠くない所に隣公園があったが、そこへは行っていない様子だった。ヨンスクは、老人が敢えて混雑して騒がしい路地を歩き回る訳を知っていた。利用価値がほとんどなくなっているのに、老人の眼には未だ使い道のある古道具を拾うためだろう。老人は、せっかく一生懸命に拾ってきた古道具を誰にも見せず、自分の部屋の片開きの箆笥の中に隠すようにきちんきちんと重ねておいた。まるでそれが、死んだ後に、自分のしわくちゃで干からびた肉体と一緒に土の中に埋められる、大切な副葬品にでもなるかのようだった。扇風機、額縁、時計、植木鉢など、古くて、つぶれたり、こわれたりしたがらくたの中に横たわり、永遠に眠る老人の姿を頭の中に描いてみたヨンスクは、肩までぶるっと身震いし、頭を振った。

ヨンスクは、玄関の方をちらりと見渡した後、お玉で鍋の中をよくかき混ぜた。オンドルの床紙が引き裂かれるように、油が固まってできた膜が破れた。黄色いのをとおりに越して青みを帯びた色がうねるスープの上に、あばら骨と首

の骨、背骨などがよきよき悪態をつくように突き出ている。ヨンスクは、お玉で骨をぐうっと押し付け、鍋の底に沈ませてから、お玉に並々とアヒルの骨のスープをすくった。お玉の中のスープをじっと覗いていると、ふうっと老人の瞳が浮かび上がった。楕円形のくぼんだお玉の中に入っているからか、老人の濁りきった瞳がだぶだぶとお玉の中に淀んでいるようだった。自分をじっと凝視しているようで、ヨンスクは、お玉を鍋の中に投げつけるように突っ込んだ。

老人は、アヒルの骨をいったいどこで買ってくるのだろうか。身を残さずきれいにむしって食べ、ばらばらになってげっそりやせ細った、グロテスクな骨を。

『オクチョンあひる食堂』で手に入れてくるのかもしれない……

ヨンスクがそう思うのにはそれなりの訳があった。去年の冬、ヨンスクは老人のお供をしてその食堂に行ったことがあった。七十三歳の誕生日を迎えた舅に、アヒルの水煮をごちそうするためだった。ちょうど夫が出張していた上に、小姑まで何か用事があって、嫁のヨンスクが一人で舅の誕生日のお膳立てをしなければならなかった。朝、わかめスープを作りはしたが、誕生日のお膳というにはおそまつなので、老人のお供をして、その食堂に行ったのだった。その食堂を教えてくれたのは、ヨンスクの実家の母だった。ミキサーにかけた長芋を入れて煮たアヒルの水煮が、釜ほどもある壺に盛られて出てくるのだが、週末は必ず予約をしなければならない程有名な店だという。「十年前だったか、つぶれる寸前の家を改造して食堂を出したんだよ。お金を熊手でかき集めるといふけど、それさ。アヒルの水煮を食べ終わるだろう。すると、おこわが竹籠に入って出てきて、そのおこわがまたすばらしく美味しいんだよ。」平日にもかかわらず席がなく、老人とヨンスクは、屋根裏部屋のようなところへ上がって、アヒルの水煮を食べた。長芋をおろして入れ、糊のようにどろどろになったスープを、老人はむさぼるようにすくって食べた。低く垂れ下がった天井を支えるように、背中を丸く扁平にかがめて。老人のせいかわかからないが、ヨンスクはどういうわけかアヒルの水煮が食べられない料理でもあるかのようにむかついた。付け合わせに出たトンチミ（大根の塩キムチ）のスープをすくって飲み、おこわを先にもらって食べた。そして、便所に行って来て会計をしようとクレジットカードを差し出すヨンスクに、食堂のおばさんがだしぬけに尋ねた。

「実のお父さんか、お舅さんか知らないけど、たびたびアヒルの水煮を食べさせてあげなけりやなりませんね。」

「……。」

「実はね。アヒルの骨をもらえるかって聞かれたんですよ。」

食堂のおばさんは、入り口の横におとなしく立っている老人をちらっと眺めて言った。

「アヒルの……骨ですか。」

「そうなんですよ。」

「アヒルの骨を、どうして……」

「どうしてかですって。アヒルの骨でもことごと煮込んで食べようと思っておいでなんですよ。」

食堂のおばさんが、わかりきったことじゃないかというように言い、ヨンスクはひどく当惑した。侮辱されたように感じ、踵を返すようにぷいっと振り返って食堂を出た。

ヨンスクは、やはり老人がその食堂でアヒルの骨をもらってくるのだと思った。右の眉の下にほくろがある食堂のおばさんに、物乞いをするように何度も頭を下げ……。そうでなければ、三、四日に一度、山ほどのアヒルの骨をどこから手に入れてくるというのか。

居間の時計はちょうど七時を回ったところだった。夫は八時頃家に帰ってくるだろう。午後四時頃、夫から電話がかかって来た時、老人はひとり食卓の椅子に座り、アヒルの骨を煮込んだスープをすくって食べていた。粗塩だけで味付けしたそのスープを、老人は時もかまわず、それがまるで不老長寿の薬にもなるかのように食べた。夕飯をどうするか尋ねるヨンスクに、夫は家に帰って食べると言った。

ご飯とスープは、朝食べて残ったのがあった。ヨンスクは、冷蔵庫から食べられそうなおかずを取り出し、食卓の上に並べた。おかずと言えば、かまぼこ炒めとオイソバギキムチ（きゅうりのキムチ）、イカの炒めものだけだった。一週間以上前に総菜屋で買ったオイソバギキムチは、崩れて汁が出ていた。老人さえいなければ、夫と地下鉄駅の近くで会い、カルククス（うどん）でも一杯食べて帰るだろうに……。ヨンスクはぴり辛のアギッチム（アンコウの煮込）も食べたかった。面倒くさかったが、塩サバ一匹を焼き、卵を四つほぐして適当に卵焼きを作った。アサリはおろか、じゃがいもとネギも入れずに作ったホウレンソウの味噌汁を温めた。ヨンスクがそうやって夕飯の食卓を整えている間も、鍋では、アヒルの骨が休みなく煮えていた。アヒルの骨を煮込む臭いと塩サバを揚げる臭いが混じって、台所だけでなく家全体に漂っていた。ベランダや浴室にまでも。

三十分も立っていたらどうか。ヨンスクは両足がむくんでくるのを感じた。足の指が、水族館のユムシのように膨れ上がるような感じだった。ヨンスクは、食卓の椅子に斜めに尻をかけて座り、苦しい息を整えた。ヨンスクは妊娠七カ

月だった。妊娠五カ月の時、医者は男の子だとこっそりヨンスクに教えてくれた。その頃、夫がちょうど出張中だったので、ヨンスクは舅である老人にそのことを真っ先に知らせた。老人にとって、息子といったら夫一人だけだった。実際、老人自身の兄弟姉妹も妹たちだけで、代々息子が珍しい家だった。老人は当然孫娘より男の孫を望んでいるだろう、というのがヨンスクの考えだった。内心安堵し、満足するだろう。跡を継いでくれる孫息子ではないか。

「男の子だそうですよ。」

「……？」

「私のお腹の中の子供ですよ。」

「そうか…。」

老人はそう言っただけだった。いくら何の感情も表さない人だといっても、それほどつれない受け答えもないものだ。よその家の嫁が妊娠したわけじゃあるまいし……。今まで、果物らしい果物の一つでも、食べろといって買ってくれたことがあったらどうか。ヨンスクのお腹が日ごとに膨らんできても、老人は予定日がいつか、一度もヨンスクに尋ねなかった。ありそうなことだ。私がつわりであれ程苦しんでいる時も、アヒルの骨を一日中煮込んでいたのだから…。ヨンスクは、妊娠四か月目までつわりがひどく、それがひとえにアヒルの骨を煮込む臭いのせいだと信じていた。ヨンスクは、アヒルの骨を煮込む臭いが充満した家で、一口の水もろくに喉を通らなかった。アヒルの骨を煮込んだスープをたくさん飲んだからなのか、老人の顔にプクプクと白い肉がつく間、ヨンスクは金串のように痩せていった。息をすることさえ苦しく、実家へ行って半月過ごす程だった。

「嫁務めも、姑一人より、舅一人の方が大変だというからね。」

結婚前、実家の母親はそんな理由で、夫が余りお気に召さないようだった。

「頼母子講のメンバーの中で、サンブ住宅団地に住んでいる人がいるんだけど、二人目の娘だったかが嫁に行って、やもめになった舅の面倒を見て暮らしているんだってよ。酒癖が悪いところにもってきて、小言がどうにもひどく、離婚までするところだったそうだよ。離婚届にはんこまでついて突きつけて、ようやく夫が舅を老人ホームに送ったんだそうだ。」

それほどまでに躊躇し、心配する実家の母を、ヨンスクは老人が酒一杯飲まないきちんとした寡黙な方だという言葉で安心させた。しかし、結婚二年で、老人はヨンスクにとって心の中がまるっきりわからない、見かけによらず腹黒い老人に変わっていた。

「おかあさん。千尋の水底は測れても、一尋の人の心中はわからないっていうことばがあるけど、今になってその意味がわかるわ。」

「ことわざや何か、昔の言葉に間違いがあるもんかい。」

「本当にそうねえ。」

「長く生きれば生きる程、聞き流していた昔のことばが骨に釘のように突き刺さってくるのさ。昔の人のことばが骨身に沁みて、血のような錆びた水をばたばたと垂らすころに、初めて分別がつくんだよ。もしかしたら、『皿の水に鼻をつけて死んだ人』っていうのも本当にいたのかもしれないさ。ああ、あり得るね。」

「お舅（とう）さんが、スイカのひとつでも、いいえ握りこぶし位のウリー一つでも買ってくれていたなら、これ程まで憎らしくはなかったでしょうにね。」

実家で過ごす間中ずっと、ヨンスクはつわりのストレスを、老人の悪口を言うことで晴らした。ヨンスクが、どうにかつわりがおさまって実家から帰って来たとき、家は、壁紙までアヒルの骨を煮込んだ臭いが染み付いていた。皿と箸、スプーン、布巾、たわしにまで。鍋にはアヒルの骨が煮えており、老人は部屋に閉じこもって筆写をされていて、ヨンスクの方を見やりもしなかった。ヨンスクが荷物をまとめて実家に行くときも、ガンジーの伝記を筆写していたが、今度はトルストイの伝記を筆写していた。小学校も出ていない老人が、ガンジーを知っている、トルストイを知っているたって、どれ程知っているというのだろうか。字を書く練習をするのでもなく、貧乏性を丸出しに、昼夜問わず何をそんなに書き写し続けるのか。そう言えば、老人が一冊一冊筆写中の伝記も、道端で拾ってきたものだった。ある日の夜、二十冊近い伝記全集を拾ってきては、居間に並べて雑巾でほこりをぬぐった。どれだけ古いものだったのか、黄色い紙の上に白い虫が這い、ところどころカビが生えていた。

もう老人が帰ってくる頃なのだが……。今日はまた、何を拾って来ることやら。

2

八時を過ぎたが、夫は家に帰っていなかった。夜の散歩に出かけた老人もだ。夫はともかくとしても、老人が戻るべき時刻は過ぎていた。家を出てから、いつのまにか一時間以上も経っていた。

夫は、約束していた時間よりも帰宅が遅れることがよくあった。時には、むやみに二、三時間遅れる場合もあった。インクを専門に作る会社の営業社員で、なんだかんだと急に酒の席が設けられるのだ。二日前も、夫はいくら遅くても九時までには家に帰ると言い置いて、夜中の十二時近くになってやっと、酒に酔って帰って来た。

カリカリに焼いたサバを皿に盛りつけていると、階段を上ってくる足音が聞こえた。そして、マンションのどの家か、玄関のドアが開いて閉まる音が聞こ

えた。ヨンスクはサバを盛りつけた皿を食卓に置いた。

202号の女が帰ってきたのだろうか。

ヨンスクは、ほうれん草の味噌汁をかけていたガスレンジの火を消した。黒っぽく煮崩れたほうれん草が、黄色い味噌汁の中で舌のようにぺろぺろと揺れた。ヨンスクはほうれん草を一筋箸ですくい、口に持っていった。窒息しそうに舌に絡みつくほうれん草を、やっと喉の奥に飲み込んで、居間の時計を眺めた。

実は、ヨンスクは夫と老人を待ってもいたが、202号室の女を待ってもいた。アパートの階段で何度か顔を合わせた以外には、一言も言葉を交わしたことの無いその女を。ヨンスクがその女を待っているのは、前の日老人からおかしな話を聞いたからだ。

「下の階の女が、明日の夕方三十万ウォンをもってくるだろうよ。」

下の階と言えは202号室だった。

「わしがその女に三十万ウォンを貸してやったんだ。金はあるに返すようにとっておいた。」

「私にですか。」

「明日の夕方、その金を返すと言っていた。」

「でも、なんで私に……？」

「必ず返すと言ったから……ああ、必ず返すと……」

「……」

「その金を受け取ったら、使いたいことに使えばいい。」

老人はそう言って散歩に出かけた。202号室の女を知っていると言ったって、たいした親しい仲でもないだろうに、三十万ウォンものお金をよくも貸してやったもんだ。ヨンスクは、そんなことを考えながらも、棚からぼたもちの三十万ウォンが手に入ったと思い、秘かに気を良くした。そうでなくても、妊娠した後は毎月赤字だった。毎月払い込む保険金に積立、公課金を除いてみると、生活費はかつかつだった。先々月には、医療保険が効かない羊水検査を受ける際に、マイナス通帳（貸越通帳）まで作った。だが、老人が何だってそんな金を持っていて、202号室の女に三十万ウォンも貸してやったのだろうか。もしや老人には、夫も知らないところに隠しておいた金があるのではないか。夫がヨンスクの知らない所で小遣いをやるわけもないのに、老人はなんだかんだと、ちゃんと暮らしていた。もっとも、煙草も吸わず、酒も飲まないから、特に金の使い道がないのだろう。遊んで暮らすのを楽しむ老人でもなかった。友達も特にいないのか、老人が誰かと電話で話をしているのを、ヨンスクは見ることがなかった。水原（スウォン）に暮らしている娘とも、この方一度も電話で話したことがなかった。

三十万ウォンを迷わず貸してやる程、老人は普段から202号室の女と親しい間柄だったのか。しかし、老人の性格を考えると、そうではなさそうだった。嫁である私にも、一言も声をかけたことがない老人ではないか。ことに202号室の女は、勤めをしているのか昼は家にいなかった。同じアパートに住んでいたが、ヨンスクは202号室の女とほとんど言葉を交わしたことがなかった。四十代後半で、夫と二人の娘と一緒に住んでいるということ以外は、知っていることもほとんどなかった。もっとも、老人の心の中なんて、まるっきりわからないわけだし……ヨンスクは、なぜか、老人がアパートに住んでいる人たちについて、何もかも知っているのではないかと思った。彼らがどうやって暮らしているのか、どんなことを考えているのか、隅から隅まで知っていて、腹黒くも知らんぷりを決め込んでいるのに違いないと思った。

そればかりか、老人は、私がアヒルの骨を煮込んだスープをこっそり捨てたのを知っていながらも、知らないふりをしてしらばっくれているのではないか。私がお玉でスープをすくってシンクに流してしまうところを、何食わぬ顔で目撃しておいて……。自分でも説明がつかない、おかしいことなのだが、ヨンスクは、老人がその事実を息子である夫に告げ口しないことに、いらいらし、我慢ができないのだった。老人が知らんぷりしてしらを切っているのは、それだけじゃない。老人が食べ残したご飯とスープを全部生ごみ入れの中に捨てるのを、老人が脱いだ服を別に分けて洗濯機に入れるのを、老人が使った後はワックスをたっぷり振りかけて洋式トイレを磨くのを、みんな知っていて知らんぷりを通してしているのだ。

ヨンスクは今更のように、老人がこの家にやって来て一緒に暮らし始めてから、かれこれ二年になろうとしていることを思い起こした。病気がちでもなかった老人が突然中風で倒れたので、仕方なく世話して暮らすことになったのだ。入院して過ごす間、回復は早かったのだが、倒れる前よりも、老人の言葉は訥々とし、動作はのろのろとまだるっこしくなっていた。その間に、夫は老人がひとりで暮らしていたマンションを処分して、株式とファンドに投資し、八カ月でほとんど元も子もなくした。ちょうどファンドが流行していた時だった。急いで売ろうと、市価より三、四百万ウォンも損をして売り渡したそのマンションは、老人の全財産も同じだった。好むと好まざるとにかかわらず、ヨンスクは老人と一つ屋根の下で暮らす他なかった。

ヨンスクは、ふいに肩をびくっと硬直させ、後ろを振り返った。老人が背後で自分をじっとみつめているかのような錯覚に陥ったからだった。ヨンスクは昼寝をしても、手足をばたつかせて目覚めたりした。老人が自分をじっと見下ろしている気がしたからだった。皿洗いをしていても、掃除機をかけていても、ベランダで洗濯物を干していても、テレビや新聞を見ている、じろっと……。

ヨンスクがそんな状態に陥ったのには、それなりの理由があった。

老人がやってきて一緒に暮らすようになってから、一年が経とうとしていたある日のことだった。その日も、夫は八時頃家に帰ると言っておいて、九時過ぎても帰って来なかった。ヨンスクは、仕方なく老人と二人っきりで食卓に向かい合い、夕食を食べた。ヨンスクがふっと顔を上げた時、老人はヨンスクをじっと見つめていた。

「何ですか。」

「…」

「どうして、私のことそんな風に。」

「…」

「そんな目で見ないでください。何なんですか。」

それでも老人は口をきゅっと閉じたまま、ヨンスクをじっと見つめるばかりだった。老人がこれといって害のあることをしたわけでもないのに、ヨンスクは、経験したことの無い不思議な恐怖心にとらわれた。はっきり何だと説明することのできない恐怖心に。

とにかく、そんなことがあった後、ヨンスクは絶対に老人と二人っきりで食事をしなかった。夫が遅い日は、食卓を準備して部屋に入ってしまった。老人が食事を全部終えた後に、ようやく部屋から出て一人食事をした。老人も一人で食事をするのが気安いようで、食事を終わると静かに自分の部屋に入ってしまった。そして、ヨンスクが食事を終えるまで、絶対に部屋から出なかった。夫が何かで早く帰宅する日には、老人と一緒に夕食の食卓を囲み、何事もなかったように食事した。

目に見えて良くなっているとはいうものの、老人は、まだ中風の患者だった。アヒルの骨のスープをすくって食べるとき、スプーンを握る老人の右手が震えているのを、ヨンスクは何度も見た。右手がひどく震え、やっとすくい上げたスプーンの中のアヒルの骨のスープが、脇からちよろちよろ漏れ落ちているのも見た。ただ、それをヨンスクが知らんぷりしているだけだった。ゆげがもこもこ湧きあがる鍋から、アヒルの骨のスープをひと杓ひと杓すくうことが、老人には大きく重いレンガを一枚一枚持ち上げる程、手に余ることだろう。にもかかわらず、ヨンスクは、ただの一度もアヒルの骨のスープを盛り分けて、老人の前に置いてやったことがなかった。

老人がまた倒れでもしたら、どうするということのか。まさか生れたばかりの赤ちゃんがいるのに、中風で倒れた老人の看病まですることになるんじゃないでしょうね。

ところで、202号室の女は、なぜお金を返しに来ないのだろうか。もしかしたら、三十万ウォンを返さなければならないことを、忘れたのではないだろう

うか。ヨンスクは、三十万ウォンが老人ではなく、自分が貸してやったお金でもあるかのようにいらした。

私に返すように言ったのだから、私のお金でしょう。私のお金。

ヨンスクは、三十万ウォンを何に使うか、もう考えてあるのだった。生れてくる子供のおむつと洋服を入れておく筆筒を買うつもりだった。三十万ウォンあれば、あれこれと使い勝手のいい筆筒を買うことができるだろうと思った。

居間の時計は、いつしか九時になろうとしていた。皆が家に帰って行く時間に、一人で路地をさまよい歩く老人を思い、ヨンスクは我知らず眉間にしわを寄せていた。ひと月程前、美容院に行った帰り路、家の近所の路地を一人で歩いている老人を見かけたことがある。よりによって、老人の後ろ姿を……。集合住宅が密集して建つ路地だった。建物の入り口ごとにごみが積みあげられ、電線が網の目のように空を覆っている路地。

その日、ヨンスクは結婚前から伸ばしていた髪をショートカットにした。髪に惚れたと夫が言う程、ヨンスクの髪は長くてふさふさとしていた。櫛で梳かそうとしたら、髪からへどが出る程の獣臭いにおいがした。アヒルの骨を煮込んだスープにどっぷり漬けて取り出しでもしたように。ヨンスクは我慢できず、すぐに財布を取り出すと美容院に行った。髪がざくざくと切られている間、ヨンスクは鏡をじっと見つめながら老人を恨んだ。考えて見れば、髪を切ったのは、もっぱら老人のせいだけでも、髪まで染みついたアヒルの骨を煮込んだ臭いのせいだけでもなかったのだが。だんだん暑い季節になり、ヨンスクはそうでなくても長くて濃い髪のせいでうっとうしさを感じていた。大きくなったお腹のせいで、かがんですわることもできず、髪を洗う大変さは並大抵ではなかった。まだ子供を産んでもいなかったが、前より髪がうんと抜けるようだった。美容院を出て、その隣の粉食店で大根ククスを一杯食べ、帰ってくる道でヨンスクは老人を見かけた。

老人は、醤油で煮た牛蒡のような路地を、両足をずるずるひきずりながら歩いていた。櫓でも漕ぐように左手を揺らしながら。大げさに振り回される左手とは違い、四十度程宙に持ちあげられた右手は、義手のようにこちこちにこわばり固まっていた。老人は、せっかちに足を踏み出し、ヨンスクは、老人がそうやって前につんのめるのではないかとほらはらした。両足を絶えず交互に踏み出しても、歩幅が狭いからか、老人の歩みは限りなく遅かった。五、六歩の距離を置いてゆっくり後をつけて歩いていたヨンスクは、じれったくて堪らず、結局歩みを速め、見ないふりをして老人をさっと追い越してしまった。路地の端に近づき、ヨンスクがそっと後ろを振り向いたとき、老人は、影も形もなく消えてしまっていた。目を皿のようにして路地の隅々を捜したが、老人はどこ

にもいなかった。ヨンスクは、老人がその路地からだけでなく、この世の中のどこからも忽然といなくなってしまうようで、しばし呆然と立っていた。しかし、ヨンスクが家に戻って二十分位すると、老人は何事もなかったように扇風機を拾って帰って来た。

間違いなく、私を見たんだわ。舅である自分を、見ず知らずの他人のように追い越す私のことを…。老人が心の中では、私をどれ程不届きだと思ったか…。

とにかくその日以後、ヨンスクは老人が散歩に出ている間、できる限り家にいた。家の外に出れば、万一にも路地で老人と出くわすかと思っただけのことだった。テンジャンチゲ（味噌鍋）に入れる豆腐を買うため、アパートの階段を下りかけて、また引き返して上がって来たこともあった。ヨンスクは、かぼちやばかりたつぷりと刻んで入れ、豆腐の入らないテンジャンチゲを、夕食の食卓に載せた。

夫と老人が帰ってこない間に、塩サバは、かちかちに固くなった。卵焼きは、なま臭いにおいが漂っていた。ヨンスクは、釜からご飯をよそいかけて元に戻した。ご飯ではなく、別のものを食べたかった。そうでなくても、ヨンスクは頓に食欲が旺盛だった。つわりで全く受けつけなかった食べ物を後になって補おうとでもいうように、ヨンスクの身体は際限なく食べることを要求した。今日の昼時は、中華料理店に行ってひとりでジャージャー麺まで食べたりした。老人がひとり食卓にぼんやりと座り、アヒルの骨を煮込んだスープをスプーンですくって食べている時間に、ヨンスクは脂の乗った黒い麺を箸でつまんで食べた。ヨンスクは、もしかしたらと思って冷蔵庫の中を調べた。数日前に食べ残してビニール袋に包んでおいた餅がヨンスクの目に入った。ヨンスクは、シンク台から鍋を取り出し、ビニール袋の中の餅をあけた。餅は、冷たく固まっていた。ヨンスクは、水を少し注ぎ、鍋をガスレンジにかけた。ふたをしっかり閉めておいても、鍋から漏れ出る湯気がしょっちゅうヨンスクの顔を飲み込んだ。

いつか、につっきあの鍋を処分しなければ……。アヒルの骨を煮込んでいる間、ガスレンジが噴き出す熱気、そして、こぼれ放題のスープが噴き出す熱気は相当なものだ。本格的な暑さが始まると、家はガスレンジの上のあの鍋が一日中噴き出す熱気で沸きたつだろう。その上、前後に集合住宅の建物がぎっしり建て込み、風がろくに吹き込まないわが家ではないか。アヒルの骨ではなく、私の骨までどろどろに溶け出しそうではないか。

ヨンスクは、せっかく温めたトッポッキを食べるのもそこそこに箸を置いた。何日か冷蔵庫に突っ込んでおいたせい、これといった味もしなかった。

忘れていたらどうしよう。だけど、必ず返すって言ったじゃないの。必ず返すと、必ず……

ヨンスクは、ラーメンでも作って食べようとしてやめ、202号室に行こうと、玄関の外に出た。202号室の女は忘れているのかもしれない。202号室までは、ヨンスクの家から階段を十二段下りればよかった。ヨンスクは大きくなったお腹を片手で包み込むようにして、階段を慎重に降りて行った。階段から間違っただけで足を踏み外し、転げ落ちでもしたら大変だった。ヨンスクが202号室を訪ねて行くのは初めてだった。

玄関のドアを五回叩いても、中からは何の返事もなかった。202号室の女は、やはりまだ帰って来ていないようだった。それに、夫と娘もだ。

ヨンスクは、仕方なく、202号室のドアの前で回れ右をし、また階段を上って行った。

3

十時近くになっても、老人は帰って来なかった。夫も、そして202号室の女も。誰も帰ってこないで、ヨンスクは食卓を片づけることも、安心して寝ることもできなかった。

老人は、今どの路地を歩き回っているのか。まさか家に帰って来る道を忘れてしまったのではないだろう。

夫は、わざと家に帰らないのかも知れなかった。つまり、老人のせいで、老人とばつの悪い対面をしなくても済むように。老人が死んだように眠るまで待とうと思って、帰って来ないのかもしれない。よくよく考えてみると、老人が金を用意しておくように言った後、夫の帰宅が遅い日が多くなった。八時か九時に帰ると言っておいて、老人が寝入った後になって酒に酔って帰って来る毎日……。

老人は、本当にこれまで何も知らずにいたのだろうか。それもまた皆知っていながら、知らないふりをしてしらを切っていたのではないか。万一そうだったなら、どうしてこれまで恨みごとの一つも言わないでいられるのだろうか。息子は夫ただ一人とはいえ、全財産だったマンションを売った金を、老人に一言の相談もなく、元も子もなくしてしまったというのに。

本当に出し抜けに、老人が金を出すようにと言ってきたのは、二カ月程前だった。その日、夫は八時前に家に帰ってきた。ヨンスクは、豚肉のキムチチゲを煮て、夕食の食卓を整えた。ヨンスクが平鉢に取り分けてくれたチゲのスープをスプーンですくって食べている最中、老人がいきなり夫に尋ねた。

「うん、八千万ウォンは間違いないよな。」

夫もヨンスクも、いったいなんの話なのかわからず、老人をまじまじと見つめた。

「全部でなくてもいい。全部でなくても……。」

老人はぶつぶつ言って、スプーンですくったキムチの切れ端を口に運んだ。

「九千万ウォン全部を寄こす必要はない……。」

口をもぐもぐさせ、またそうつぶやいた。

「四千万ウォンあれば十分だろうよ。」

「四千万ウォンですか。」

夫が、ようやく箸を食卓にかたんと置いて、老人に尋ねた。

「年寄り同士が集まって暮らすマンションがあるというんだ。」

「マンションですって……。」

老人にそう聞いたのは、夫ではなくヨンスクだった。

「シルバータウンと言って……三千万ウォン出しさえすれば、今すぐにも入居できるっていうんだ。」

老人は、夫とヨンスクの間をぽっかり空いた空間を、両方の目でたどった。

「毎日運動もさせてくれて、時々観光バスで旅行にも連れて行ってくれるというんだ。常駐する看護師もいて、薬もそのつどきちんと用意してくれるそうだから……今まで銀行に預けておいたんなら、利子がそれなりについただろう。」

つまり、老人は、マンションを売った金八千万ウォンから、四千万ウォンだけ下ろしてくれと言っているのだった。夫は、八千万ウォンを株とファンドに投資し、老人には銀行積立にしっかり預けておいたと言って安心させておいたのだ。

「銀行の利子が六パーセントとしても、八千万ウォンなら一年で……」

「今どき、利子を六パーセントもつける銀行がどこにあるっていうんですか。」

夫がきつと神経を苛立てた。

「八千万ウォンといえ少ない金じゃない。泥棒じゃあるまいし、銀行はその位の利子をつける義務があるんじゃないのか。」

「物わがりの悪いことを言わないでくださいよ。最近の銀行金利は、せいぜい三パーセントちょっとといったところですよ。」

「八月前には、もらいたいものだ。猛暑の前になってことだよ。あまり暑いと、お互い不都合なこともあるからな。」

そう言って、老人は先に席を立ち、いつもより遅い夜の散歩に出かけた。その日以後、老人は、二度と金の話を持ち出さなかった。だが、いつまた老人が四千万ウォンを出せと言ってくるかわからないと、ヨンスクは思った。何しろ、腹の中はわからない老人だから……それに八月前には入居したいと釘を刺したりして。だが、四千万ウォンを今すぐどこから用立てるというんだろう。

その上、子供が生まれれば、金のかかることが山ほどあるだろう。実家の母は、上の兄の子供たちの面倒をみているから、産後療養院に入って産後の養生をしなければならぬ身だった。ヨンスクは、八月前までに、夫が四千万ウォンを老人の手に渡すことはできないとわかっていた。その上、出産予定は八月初めだった。老人も私が子供を産む前に、この家から出て行きたいのだろう。だからといって、二カ月後には生まれる孫に対して、どうしたらあれ程冷淡になることができるのだろうか。他人の孫じゃあるまいし……。

老人さえいなければ、あの部屋を子供部屋にすることができるのに……。

子供の生まれる日が近づいたせいか、ヨンスクは、老人が独り占めしている小さな部屋を子供部屋にしたいという欲望がぐっと強くなった。チョンセ賃貸で住んでいるアパートは、部屋がたかだか二つだった。大きな部屋は夫婦が、小さな部屋は、老人が使っていた。老人が同居する前まで、小さな部屋は衣裳部屋として使っていた。居間はソファーも持ち込むことができない程狭かった。息子だということから、青い色に壁紙も新しく張り替えて、カーテンも下げればどれ程かいいだろうに……。友達がくれるというゆりかごを置いておく場所もろくになかった。ゆりかごを並べておくためには、大きな部屋のベッドを捨てなければならぬ状況だった。

妊娠中に誰かを憎むと、お腹の中の子供が、憎むその誰かに瓜二つになってしまうという。ヨンスクは、老人に似た子供が生まれる可能性もないわけじゃないとわかっていた。子供にとっては、実の祖父ではないか。老人の、ばかのように垂れ下がった目と長い鼻の下に、そっくりの子供が生まれる可能性だつてあるのだ。そうでなくても、ヨンスクは、最近になって急に、夫が老人に瓜二つだとたびたび思うようになった。嫁である私とは、血一滴混じっていなかったが、夫には本当の父親ではないか。早くに亡くなり、写真でしか見たことのない姑に似ていると思ったのだったが、そうではなかった。妻である私にまで本音をなかなか言わないことまで、全部老人に似たからに違いない。

ヨンスクは、居間へ行って、受話器を取り上げた。

「お母さん、私よ。」

「うん…。」

「もう寝たの。」

「九時過ぎると眠気が襲って来るんだよ。」

「…」

「お舅さんはお元気かい。」

いつからだったか、実家の母はヨンスクと電話で話をするとき、老人の具合を真っ先に聞いた。妊娠した後、慢性頭痛のようにヨンスクを苦しめているいらだちや憂鬱の元が舅だということを、誰よりもよく知っているからだった。

「今日もアヒルの骨の煮込みスープを、お玉に一杯は食べたようよ。」

「お舅さんにも、全く。百歳まで長生きしそうね。」

「お母さん、うかつにそんなこと言わないでね。始終口にはしていると本当のことになるっていうじゃない。」

「お前、食べるものはちゃんと食べているの。」

「お舅（とう）さんが一日中家にじっとしているせいか、食べたいものがあったても、お舅さんの目が気になって食べることもできないわ。一日中監視されているみたいで、刑務所暮らしと同じよ。老人ホームのようなところででも通えばさぞかしいいでしょうね。囲碁か何かでもやってくれればいいのに。」

「ああ、もう、かまわず放っておけばいいよ。そういう性格なんだから。」

二十分以上も話をして電話を切ると、ヨンスクは老人が使っている部屋に入った。二、三日に一度掃除機を持ってこの部屋に入ってはいたが、知らない人の部屋にこっそりと忍び込んだかのように、ためらいと不安を感じた。三坪位だろうか。部屋の中に家具といえば、鏡がついた片開きの箆笥とスチール製の机、テレビ、二段の引き出し箆笥がすべてだった。息子の家に引っ越して来る時、老人は家財道具をほとんど全部捨てた。何しろ、老人同様に古くなり、故障して、使えそうな家財道具は何もなかった。

ハンガーに掛けて、壁につるしておいた鼠色のジャンパーに、ヨンスクの視線がひとりでに向いた。まるで老人の魂がずっと抜け出て、もっともらしい外見だけがのこり、壁にかかっているかのようにだった。それもそのはず、老人はコーディネートするように、ジャンパーの下に黒い生地のスボンに合わせて掛けておいたのだった。ジャンパーの上にベレー帽までさりげなく掛けておいたからか、ヨンスクは、ベレー帽を取り上げると、崩れた洗濯石鹸のような老人の顔がにゅーっととび出して来そうだと思った。ヨンスクはベレー帽をとり外したい衝動を抑え、机の方へ歩いて行った。

机の上には、老人が筆写中の聖書と、小学生用の罫目が大きいノートが拵げられていた。この間、二十冊以上もある伝記を全部筆写したのだろうか。老人が聖書を筆写するのは、信仰心のためではなさそうだ。老人は信者ではなかった。信者でないだけではなく、老人にはこれと言った宗教がなかった。信者ではないのに聖書を筆写するというのが、ヨンスクにはどこか滑稽で余計な苦勞にしか見えなかった。その上、アヒルの骨を煮込んだスープをすくって食べる時さえ、ぶるぶる震えるその手で筆写するなんて…しかし、筆写は、なにもすることのない老人にとって、趣味であり、暇つぶしなのだろう。老人は、聖書に書かれた文字をそのまま一文字一文字ノートに書き写しながら、自分にくらも残っていない時間を耐えてでもいるのだろうか。この聖書も間違いなく

路地のどこかから拾って来たものだろう。

ヨンスクは、机の下に入れておいた椅子を引き出し、そこに尻を半分位かけて座った。老人がノートに書き写した文字を、一文字一文字消すように読んでいった。

すべての衣服と、すべての皮の器と、すべてやぎの毛で作ったものと、すべての木の器とを清めなければならない。

どれだけぎゅっと押し付けて書いたものか、文字はまるで老人が指で押しつけて殺したアリのようだった。目が回るように渦巻いている指紋で、押しえつけられて非業の横死をしたアリたちが、ノートの上に一列横隊で並んでいるようだった。列と間隔がきちんきちんと揃っていたが、詳しく調べてみれば文字は一画一画が細かく震えていた。

ヨンスクは、何行かとぼして読み続けた。

金、銀、青銅、鉄、すず、鉛など、すべて火に耐えるものは火の中を通さなければならない。そうすれば清くなるであろう。なおその上、汚れを清める水で、清めなければならない。しかし、すべて火に耐えないものは、水の中を通さなければならない。

一文字一文字、声を出して読んでいくうちに、老人に向けた、ひげ根のように細くてもつれた数十本の感情が、からまり、何度もよじれ、一本になった。

太くはっきりした一本の感情。

それは、意外にも恨みや憐憫のような感情ではなく、恐怖心だった。

本当に怖い老人だ。ヨンスクは、自分でも無意識にぶつぶついい、首を右に向けた。目のあたりにプルプルと痙攣が走る程、ベレー帽をにらんだ。やはり壁にかかったベレー帽の中に、老人の顔が隠れているに違いないという強烈な思いに駆られ、ヨンスクは椅子から身体を起こした。ベレー帽の方に一步一步注意深く近づき、ベレー帽に手を伸ばした。

ベレー帽をぱっと押しおけると同時に、ヨンスクは、思わず悲鳴をあげた。ベレー帽が放り投げられたように部屋の床に落ちた。

ベレー帽の後ろに隠れていたもの。それは、ただの釘の頭だった。それでもヨンスクは、老人の顔が部屋の中のどこかに隠れ、自分をしっかり見張っているような気分をなかなか振り払うことができなかつた。ベレー帽を拾って元のとおり掛けておくことも思いつかず、ヨンスクは急いで老人の部屋を出て行った。

老人の部屋の戸をしっかりと閉めた後、ヨンスクは、202号室を訪ねた。老人が貸してやったという金三十万ウォンをもらって来るためだ。だからといって、今夜のうちに必ず三十万ウォンを受け取らなければならないというのではなかった。だが、絶えず気になって仕方がないので、今夜ぐっすり眠るためにも、今もらって来た方がよいと考えたのだ。そうでなくてもヨンスクは産み月が近づくにつれ不眠に苦しんでおり、昨晚も明け方三時過ぎまで眠りにつくことができなかった。

202号室の女は、まだ帰って来ていなかった。その夫と娘もだ。毎日こんなに遅いのだろうか。202号室の女がなかなか戻って来ないことに対して、ヨンスクはいらいらを通り越して怒りを感じた。今夜金を必ず返すと言ったのなら、返さなければならないのではないか。それも親程の歳の老人の金を借りて行ったのなら……。しかし、202号室の女が帰って来ないのは、それなりの理由があるのだろう。

誰も帰って来ないせいか、ヨンスクは他の人たちは家に帰って来たのだろうかと思ってみた。みんなはいつもの夜と変わりなく、何事もなく帰って来ているのだろうか。

ヨンスクは、階段の途中の壁についている窓にぴったり寄り添って立ち、向かいのアパートを眺めた。向かいのアパートは、ヨンスクが住んでいるアパートと十歩と離れていなかった。四階建のアパートだったが、灯りのついた窓がひとつもなかった。みんな帰って来てもう寝たのだろうか。でなければ、みんなまだ帰らないのだろうか。老人と夫。そして202号室の女が帰っていないように。

ヨンスクは、ともすると誰も帰って来ないのではないかと疑った。だから、本当に誰も……。

4

十一時近くなっても帰って来ない老人を心配する一方で、ヨンスクは、老人が帰って来ないことに安堵する気持ちもあった。正直言って、老人が散歩のために玄関のドアから出て行くたびに、帰って来なければいいと願ったものだった。老人がどこか行ってしまったら……。一カ月に一回位顔を見て暮らす方がどれ程いいだろうか。だからか、散歩を終えた老人が一人で玄関のドアを開けて入って来るとき、ヨンスクは、どうしようもない失望感にとられるのだった。老人の手に古道具でもあろうものなら、鬱憤がこみ上げてくる。だが、金輪際

娘の家とも行ったり来たりしない老人ではないか。地下鉄に乗りさえすれば行くことのできる娘の家にも。夫が四千万ウォンを作ってくれない限り、老人が行けるところといったら、老人ホームだけだろう。

ヨンスクは、老人が今すぐにでも家に帰って来て、四千万ウォンを出せと要求するような気がして不安だった。夫ではなく、ヨンスクに対して。

老人がどれ程頑固かを、ヨンスクは誰よりもよく知っていた。自分の意志など何もないようだが、老人は自分が決めておいた規則のとおり乱れなく生きていた。嫁であるヨンスクに日常のことを頼り、言うことを聞くふりをしているが、水の上に浮かんだ油のように徹底して混じり合わない。私がアヒルの骨を煮込むのをこれ程毛嫌いしているにもかかわらず、一日中アヒルの骨を煮込んでいる老人ではないか。否応なく死を思い浮かべてしまう肖像写真を、居間の壁にこれ見よがしに掛けておくのを見ただけでも……。自分の死がそれ程遠くないということを、始終息子の嫁に思い出させようという魂胆なのだろうか。四カ月位前、老人はヨンスクに一言の相談もなく、自分の肖像写真を居間の壁に掛けておいた。

「お舅（とう）さんにあの肖像写真を外すように言ってよ。見るたびにぎくっとするわ。まるで死んだ人を見るみたいじゃないの。」

ヨンスクは、ぞっとしながら、夫にその言葉を五、六回言った。しかし、肖像写真は、相変わらず居間の壁に掛かっていた。ヨンスクは、気が重くなるだけでなく、肖像写真の中の老人の服装まで気にいらなかった。肖像写真の中の老人が身なりをきちんと整えて着ていた改良韓服は、よりによってヨンスクが買ってあげたものだった。ヨンスクは、それを百貨店の地下売り場で、七十パーセントも割引きした価格で買った。わざと値札をとらず、老人にあげたのだ。安く買ったとはいえ、その服がどれだけ高い服なのかを老人に知らせるためだった。ヨンスクは挙げ句の果てに、老人が改良韓服を割引価格で買ったということまで、みんな知っているのに違いないと疑った。

アヒルの骨を煮込むのはやめてくださいと言わなければ。老人が帰って来たらすぐに……。

だが、ヨンスクにとっては、202号室の女がいつ帰って来るかわからないのと同様に、老人がいつ帰って来るかもまたわからなかった。しかも、ヨンスクの家に移ってきて暮らす間、老人の帰宅がそれほどまで遅いことは一度もなかった。老人は慶弔事や他の用事で外出しても、九時前には間違いなく家に帰ってきた。静かに小さな部屋に入って行き、ヨンスクが眠るまでできるだけ出てこなかった。ヨンスクが眠った真夜中過ぎになって、部屋を出て、夢遊病者のように居間と台所をのそのそと歩きまわった。

いっそのこと、舅ではなく姑だったなら、それならば家事と子供を任せて、また勤めに出ることもできるだろう。結婚と同時に嫌気がさしたと言って職場を辞めたが、ヨンスクは、職場生活がなつかしくもあった。夫のいくらにもならない月給で、いつマンションを手に入れ、他の人のように子供を育てることができるのだろうか。その気にさえなれば、就職するのはさほど難しいことではなさそうだった。中小の町工場で経理の仕事をしたことがあり、結婚をしても、別の町工場から経理として来てほしいと誘いがあった。

今夜のうちに帰って来るだろう。老人の行く所がどこにあるというのだろう。

夫は四千万ウォンを工面している最中だろうか。その大金を用立てることも容易ではなかったが、簡単に用立てたとしても問題だった。借りた瞬間、四千万ウォンはそっくりそのまま、夫が重荷を負わなければならない借金になってしまうからだった。返さなければならない借金としては、四千万ウォンはあまりにも大金だった。四千万ウォンに比べたら法外に少ない金だったが、ヨンスクは今夜中にどうしても、202号室の女から三十万ウォンを受け取らなければならないという強迫観念があった。不意に、その金を今夜のうちに受け取ることができなければ、永遠に手に入らないような不安に襲われた。

偏屈なじいさん。どうせくれるのなら、直接返してもらってからくれればいいものを。

ところで、老人が202号室の女に金を貸してやったのは確かなのだろうか。ヨンスクには、やはりどうしても、老人が202号室の女に三十万ウォンを貸してやったというのが変に思えた。だからといって、貸もしないのに貸してやったという人でもないのだが。仮に老人の側がそうだったとしても、いくら急に入用だったからといって、果たして上の階に住んでいる老人からお金を借りるだろうか。ヨンスクは、自分だったらいくら同じアパートに住んでいる老人でも、三十万ウォンを貸してほしいと気軽に口には出せないだろうと思った。202号室の女が帰って来ればわかるだろう。202号室の女が帰って来さえすれば……。

ヨンスクは食卓を片づけようとしてやめ、ベッドに横になった。

夢うつつでヨンスクは、玄関のドアが開いて閉じる鈍重な音を聞いた。それは間違いなく玄関のドアが開いて閉じる音だった。ヨンスクは両目を見開いて三、四秒間身動きもせず横になっていたが、身体を起こした。202号室の女が帰って来たのではないか。ヨンスクは、ベッドから起き上がった。もつれた髪をなでつけ、居間に出て行った。いつの間にか真夜中の十二時近くになっていた。202号室の女が帰って来たとしても、訪ねて行って金を受け取るにはあまりにも遅い時刻だった。申し訳なく思うどころか、私を変な女だと思うの

ではないだろうか。早く帰って来てほしいと、これ程までに首を長くして待っていたことを、あの女はわかってくれるだろうか。帰りを待つ間、私が彼女の家を二回も訪ねて行ったことを。

ヨンスクは、202号室を訪ねるため、玄関のドアを開け廊下に出た。玄関のドアが開いて、202号室の女の夫が顔を突き出した。ヨンスクは当惑し、ばつの悪い思いをしたが、すでに後の祭りだった。ヨンスクが上の階に住んでいる女だということを知り、その夫はいぶかしげな表情をした。

「何かご用ですか。」

「奥さん、いらっしゃいますか。」

「家内のことですか。」

男は少し目を見開いた。

「はい。」

「家内に、なぜ。」

「もしかしたらお忘れかと思ひまして。」

男がどういう意味かというような表情をした。

「奥さんが、借りて行ったお金を必ず返して下さいとおっしゃったんです。必ず返すと。」

ヨンスクは顔がかつと火照って、お腹が少し引きつった。

「借りて行ったお金ですか。」

ヨンスクはとっさに、老人が貸してやった金を、202号室の女の夫からでも取り戻さなければならぬと思った。それ程、今夜のうちにどうしてもその金を受け取りたかったのだ。

「うちの舅（ちち）が、奥さんに三十万ウォンを貸して差し上げたようなんです。そのお金を私に返して下さいとのことでしたのに、いくら待っても……。」

「そんなはずはありません。ちょっとやそっとのことで、他人からお金を借りるような人間ではないんですが。」

男がすぐにヨンスクのことばを遮った。

「奥さんは、まだお帰りではないようですね。」

「家内がお金を借りるはずはないんですが……。」

男が首をかしげた。

「うちの舅（ちち）がそう言ったんです。202号室の奥さんが三十万ウォンをと…。奥さんはまだお帰りでは……。」

「家内は……。」

当惑した男の顔がセメントのように固まった。男の背後から、静かにお父さん、と呼ぶ女の子の声が聞こえてきた。

「家内は……」

男はため息の末に口を閉じてしまい、ヨンスクを二秒間じろじろ眺め、玄関のドアを閉じた。

「あの……。」

ヨンスクは閉じられた玄関のドアの前で、すぐに帰ることができず、しばらく呆然として立っていた。何ですって。まだ帰って来ていないですって。こんなに夜遅く、金貸しのように訪ねて来たことに気分を害したとでも。余程のことがなければ金を借りない人間ですって。なら、老人が嘘をついたとでも言うの。いまだに帰って来ないなんて、いったい皆いつになったら帰って来るつもりなのよ。

ヨンスクは、階段に足をかけて上りかけてやめ、階下に降りて行った。マンションの入り口に立ち、待ちかねた様子で路地を見やった。振興スーパーの看板の灯りと電信柱に設置された街路灯の灯りで、路地はそれ程暗くはなかった。誰かが路地を歩いて来る。老人かと思ったが、制服姿の男子生徒だった。男子生徒は、アパートを通り過ぎて行った。シャッターが下りる音が聞こえてきて、振興スーパーの看板の灯りが消えた。ヨンスクは、ややためらって、それから路地を歩いて行った。

足が腫れたためか、スリッパをパタパタと引きずりながら路地を歩き回ったが、ある家の門の前に置かれた箆筒が、ヨンスクの目に入って来た。螺鈿の箆筒だった。パズルのようにはめ込まれた螺鈿が、暗がりの中で不思議な色を発していた。ヨンスクは、その光にとりつかれでもしたかのように、箆筒に近づいた。

老人が、もしかしたらその螺鈿の箆筒の中に入って寝ているのではないか。自分が拾った螺鈿の箆筒を、別の誰かが持って行きでもするかと思って、その中に入ってうずくまっているうちに、うっかり眠ってしまったのではないだろうか。

ヨンスクは、もう一步螺鈿の箆筒に近づいて、取っ手を握った。一瞬息を止め、螺鈿の箆筒の戸をぱあっと開いた。

だが、螺鈿の箆筒の中は、がらんどうだった。ヨンスク自身の中に入り、うずくまって眠りたいような衝動に陥る程、がらんとした……。

ヨンスクは、そのがらんとした空間を凝視しながら、いきなり張ってくるお腹を軽くさすった。

ヨンスクは、再び老人の部屋に入っていた。部屋の中を一度ぐるっと眺めた

後、机の前に行って座った。机にぴったり身体をくっつけて座り、ボールペンをつかんだ。「≡」という字の上にボールペンの先を持って行って当てた。習字紙がその上に重なっているかのように、同じように「≡」を書いた。重ね書きした格好になり、「≡」は別の文字より太くて濃くなったせいか、格別に目についた。ヨンスクは「≡」の次に幾列にも続いている文字も、同様に書いていった。

レピデムを出立してシナイの荒野に宿営し、シナイの荒野を出立してキプロテ・ハッタワに宿営し、キプロテ・ハッタワを出立してハゼロテに宿営し、ハゼロテを出立してリテマに宿営し、リテマを出立してリンモン・パレツに宿営し、リンモン・パ

まさか、あの筆筒の中に入っているのではないでしょうね……。

ヨンスクはふいに、老人が筆筒の中に隠れているに違いないと思った。拾い集めた古道具の中に隠れて、夢うつつの境地に浸っているに違いないという……。ヨンスクは筆筒の方に注意深く近づいて行った。

まさか……。

ヨンスクはそう思いながらも、とうとう筆筒の取っ手に手を伸ばし、そっと握った。ガチャンという音をさせて筆筒の戸を開け、躊躇しながらもあたふたと筆筒の中を調べたヨンスクは、ぎょっとした。古道具で一杯なはずの筆筒の中ががらんとしていたのだ。路地に置かれていた螺鈿の筆筒と同じように。瞬間的に、筆筒の中のがらんとした空間と、螺鈿の筆筒の中のがらんとした空間がオーバーラップし、ヨンスクは、そのがらんと空いた空間に吸い込まれていくような目まいを感じた。

老人が、古道具を皆どこかに捨てたのだろうか。前日の夕方も、老人はご飯釜を拾って来たのではなかったか。ちらちらと私の様子を覗き、急いで部屋に持って入ったのではなかったか。ヨンスクは筆筒の戸をもとどおりしっかりと閉めると、机の前に戻って座った。

ノートをめくっていたヨンスクの手が、躊躇して止まった。ヨンスクの瞳が、文字をさっと一瞥した。

セムの系図は次のとおりである。セムは百歳になって洪水の二年の後にアルパクサデを産んだ。……アルパクサデは三十五歳になってシラを産んだ。……シラは三十歳になってエベルを産んだ。エベルを産んだ後、

無意識のうちに、ヨンスクの手がボールペンを握った。手の甲の腱が出っ張る程、力を込め、文字の上に文字を重ね書きし始めた。

産んだ。産んだ後、

と、その瞬間、麻痺したように、ボールペンを握りしめた手の動きを止めた。余りにもぎゅうっと押し付けていたためか、ボールペンからインクが流れ出て、黒い水たまりができていた。水たまりは少しずつ広がって濃くなり、水たまりの中に字が水没するように吸い込まれていった。

産み、また産んで、太い綱のように丈夫な系図に連なってきた人たちが、夜のように暗い水たまりの中に水葬されていった。

ヨンスクは、水たまりを広げでもするように、まるく円を描いた。ノートの上の文字が、一文字残らず水たまりの中に吸い込まれていくまで待つて 一気に身体を起こした。

老人も、夫も帰って来ない。

そして、202号室の女も。

6

手つき鍋の中のアヒルの骨のスープは、底まで煮詰まっていた。しゃもじ一杯にもならない程煮詰まったスープの中で、骨が悪態をついていた。ヨンスクは、ガスレンジの火を一気に強くした。ガスレンジの火が、飢えた獣の舌のように鍋の底をなめ尽くした。スープが煮詰まり、骨以外は残らなくなるまで、身じろぎもせず立って見守った。ヨンスクの顔と喉は、熱気に耐えながら汗でかてかしていた。スープが煮詰まるのを乗り越して、骨が白く干上がっていた。

今夜老人は、ひと匙のアヒルの骨のスープも口にすることができないだろう。

ヨンスクは、ふたをぴったり閉めて、ガスレンジの火を消し、換気扇を回した。一晩中回しておいたとしても、アヒルの骨を煮詰めた臭いが、すっかりなくなることはないだろうと知りつつも。

ヨンスクは、老人の肖像写真を一度眺めた後、玄関のドアの方に歩いて行った。アパートの階段を下りて行き、路地に立った。路地で道に迷ったかもしれない老人を捜すためだ。ヨンスクが老人を捜して家に戻って来た時に、夫と202号室の女が帰って来ていることを願いつつ。まるで何事もなかったように。

